

稲作

異常還元の早期発生に注意  
初期生育、雑草対策に適期水管理

今月の栽培技術留意点

田植え作業が本格的に始まり、温暖化によって生育期間が短く、前進する傾向にあるため、田植え直後からの水管理を中心とした作業が重要となります。

弁当肥実施で素早い活着

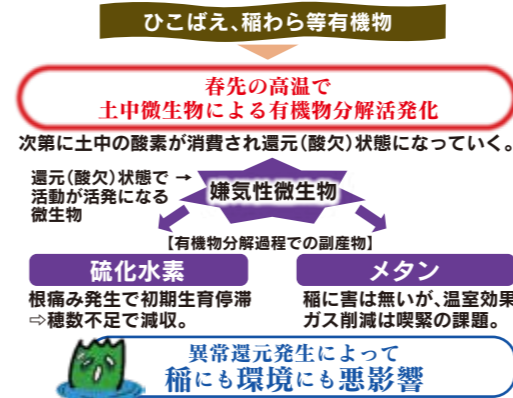
田植えの1週間前に弁当肥として追肥を行います。苗が栄養不足状態で田植えをすると活着(発根)に時間がかかってしまい初期生育に影響します。老化苗や異常還元の影響を最小限にし素早く活着させるために、田植え前に必ず育苗追肥を行ってください。

資材名	液肥 2号	サイコー 11号
現物量	10ml	8g
窒素量	1.0g	1.04g
水量	1,000ml	—

※サイコー11号は散布後にかん水を行います。

4月発行の情報で、肥料名が間違っていましたので訂正します。正しくは「サイコー11号」です。施肥量等は変わりありません。

異常還元発生の仕組みと影響

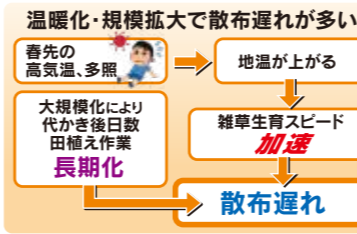


今年も気温が高く推移しており、異常還元が早期から発生する可能性があります。特に、昨秋からの春にかけて十分にほ場が乾かせなかったところを中心に強く発生する恐れがあります。田植え後、水管理による土中への酸素供給とガス放出で異常還元を抑制する必要があります。除草剤散布のタイミングを見ながら、水の入替えや飽水管理を実施します。

異常還元対策

雑草対策

昨年、雑草が残ったほ場を中心として、雑草発生量は多くなりました。雑草の生育や天気、使用予定除草剤の特徴に合わせた防除体系を取ることが必要です。代かきから数えて、初期剤は10日以内、一発剤は14日以内に散布してください。気温が高いほど雑草の進捗スピードが早まり、除草剤の殺草限界を超えてしまいます。雑草が多い圃場では、初期剤と一発剤、もしくは一発剤と中期剤の体系処理が効果的です。定期的に圃場に入り、発生状況を確認し、早めに対策することが必要です。



**除草剤を効かすポイント**

- 早めの散布
- 水深確保
- 止水期間
- 田面均平
- 漏水防止

温暖化による生育ステージの変化

- 栄養生長期間の短縮**  
田植えから最高分けつ期まで短縮され、茎数不足に?!
- 登熟期間の短縮**  
高温登熟による品質低下や刈り遅れで収量・食味の低下!?

温暖化を前提とした栽培管理へ意識の変化が必要



猛暑や低温、日照不足、豪雨といった極端な天候に毎年遭遇しています。今年も必ず来ると認識し、対策をしたうえで栽培管理をしていくことが重要です。温暖化によって生育期間が短く、前進する傾向にあります。今までどおりではなく、稲体や天気に合わせて、田植え直後から、水管理を中心とした作業についてももう一度見直してください。畦畔や水口・水尻などが壊れていないか、稲の様子を日々観察し、異常を感じたら原因を究明し対策を講じましょう。

異常気象対策



このページは秋田県農業共済組合との共同発行です。

初期生育確保に向けてスタートダッシュ

今年も、異常還元(ワキ)の発生が予想されますので、水管理で発生を抑制しましょう。土を酸化的状態に保つため、平時から常時湛水ではなく「飽水管理」や「間断かん水」とし、田面を一時的に露出させるだけでも効果がありますので、水の入れ替え等、ひと手間をお願いします。

田植え後の水管理のイメージ

五月	田植え	①この時期の水温は気温より高いため、水深3~4cm程度を保ち保温効果を高めるため、できるだけ湛水状態を保ちます。苗が活着するまでの4~5日程とします。
	深水管理	②苗が活着したら水深10cm程度の深水管理を1週間ほど行い、弱勢茎になりやすい1次分けつの発生を抑えます。この深水管理の時期が一発除草剤散布のタイミングです。深水にすることで除草剤が良く拡散し除草効果が安定します。
	飽水管理	③土壌の酸化状態を保つ「飽水管理」を実施。常時湛水ではなく、従来の間断かん水に加えて、一時的に田面を露出させる期間(1~2日程)を設けます。これにより土中への酸素供給とガス抜きが実施できます。
六月	飽水管理	④山間地や標高の高い低水温地帯では、温水田や迂回路、ポリチューブなどを用いて積極的に水温上昇に努め、水口付近の青立を回避します。平場地帯では早朝、気温の低い時間帯に入水し、日中は止水で水温上昇に努めます。
	深水管理	⑤泡がブクブクと発生し、異常還元となっている時は水を入れ替えるか、一晩程度、田面を露出させ土中に酸素を供給し、ガス抜きを実施します。
	深水管理	⑥目安時期:6月20日頃から水深15cm以上の深水管理で太い茎をつくるとともに8.5葉期頃から発生する弱勢茎を抑制し、太茎化を促します。深水管理は1週間ほど行います。深水管理には雑草発生抑制効果もあります(8.5~9.0葉期は直下根を伸ばす時期)。
	中干し	⑦深水管理後、中干しを行います。中干し期間中は、梅雨と重なるので期間に余裕を持って始めます。強い中干しは断根し稲を痛めてしまいますので、田面に1~2cm程度の亀裂が入り、足跡が付く程度とします。
七月	溝切り	⑧高温が予想されていますので、今年の稲作は溝切り必須。中干しの開始2~3日後に、溝切り作業をしてください。この溝が後々、役立ちます。溝の交差部分や溝と水尻は必ず繋がります。
	幼穂形成期	⑨幼穂形成期からは、水を必要とする時期に入るので、中干しはその前には終わります。幼穂形成期(11~12葉期)は、上根を張らせる時期。

**除草剤散布のタイミングを見て計画的に水管理を**  
除草剤散布後、7日間は落水禁止期間です。水の入替えなどによって水系汚染にならないように、水管理も計画的に行うようお願いします。

### 葉いもち防除は予防が鉄則

近年、箱処理剤の普及によっていもち病の発生は少なくなってきましたが、いもち病は一度発生すると広範囲に感染が広がり、食い止めるのが難しい病気です。油断せず、昨年発生した地区や、毎年発生しやすい地区・ほ場を中心に早期発見・早期防除に努めましょう。

#### 余り苗は速やかに処分を

補植用余り苗は、育苗期防除や箱処理剤を処理していたとしてもほ場にあるだけでいもち病の伝染源となります。補植作業が終わった後、速やかに土中に埋没するなど確実に処分してください。

#### ほ場内の密に注意を

田植え時に苗が重なって密植になっている箇所や、肥料が重なり葉色が濃密になっている箇所など、密な場所を中心に、いもち病は発生しやすくなります。また、いもち病無防除ほ場の隣接ほ場も合わせて、定期的に病斑が発生していないか様子を確認してください。



葉いもち予防のための箱処理剤や側条施用剤を使用していない場合は、必ずオリゼメート粒剤を散布してください。

#### 初動が大切

いもち病を見つけたら速やかに予防剤と治療剤の混合剤の茎葉散布を行います。併せて、指導機関やJAへご相談ください。

#### どんな品種もいもち防除を

管内でも様々な品種の導入が進んでいます。WCSや飼料用米、業務用米など、品種や用途を問わずどのほ場でも、育苗期防除、箱処理剤、本田防除など、基本的な防除は必ず実施してください。

箱処理剤や側条施用剤を使用していない場合	
薬剤名	オリゼメート粒剤
散布時期	6月15日頃(6/12~6/18)
散布量	2~3kg/10a
※オリゼメート粒剤は稲の生育量ではなく、時期で散布します。	
緊急対策時(例)	
薬剤名	ブラシン(粉、フロアブル)
散布時期	発生確認時
散布量	粉剤 DL: 3~4kg/10a
	フロアブル: 1,000倍 60~150ℓ/10a :8倍 0.8ℓ/10a(無人航空機)

### 斑点米カメムシ類対策は草刈りから

斑点米カメムシ類による着色粒被害は毎年多く、収入にも直結する大きな問題です。斑点米カメムシ類の主要種であるアカスジカスミカメは、水田内のホタルイなどのカヤツリグサ科雑草やノビエの穂に産卵し増殖するため、これらの雑草を水田内に残さないように除草剤を適切に散布することが重要です。斑点米カメムシ類は、水田周辺の農道・畦畔、休耕田などの雑草地に生息していることから、草刈り(除草)を徹底し、生息に好適な場所をなくすることも重要な防除対策です。

#### 農道・畦畔の雑草管理

草刈りは6月上旬から稲が出穂する15~10日前までに数回行います。8月には出穂期10日後頃に行う茎葉散布剤(殺虫剤)の散布7日後までに草刈りを行い、アカスジカス



カメムシ



おばこ一斉草刈りデー  
7/17~7/20

ミカメの増殖源となるイネ科雑草の除去に努めてください。その後、草刈りは稲の収穫2週間前以降に行います。草刈り後に水田畦畔刈り込み軽減剤や水田畦畔刈り込み代用剤(畦畔除草剤)を散布した場合は、40~50日間の抑草効果が期待できます。ただし、サキホコシなどの特別栽培米では、使用できる農薬が定められていますので、ご注意ください。

#### 法面・休耕田などの雑草管理

草刈りは6月上旬から稲が出穂する15~10日前までにできるだけ地域一斉に行い、その後は稲の収穫2週間前以降に行います。

### 除草剤を効果的に効かせるポイント

暖かい日が続くと、雑草の生育進捗が早くなり、除草剤の散布遅れが心配されます。いくら高価な除草剤でも使用時期が遅れたり、田面均平が悪かったり、部分的に水がかららない(露出している)場合、除草剤の効果は十分に発揮されません。ちよつとした点をおさえて除草剤が効く環境づくりをしましょう。

#### 少し早めの散布を

ラベルに「3葉期まで」と記載されているものでも、0.5~1.0葉程度、5日程早めのタイミングで散布することで、除草剤の効果が安定し、雑草密度を大幅に減少させることができます。

#### 除草剤散布を作業計画に組み込む

除草剤効果を一番発揮させるポイントとは「タイミング」です。雑草の動きが早い場合、散布遅れになりやすいので、代かき日、田植え日、初期剤散布日、一発剤散布日をしっかり検討し計画的な作業をお願いします。また、田植えが長期にわたる場合、途中で除草剤散布日を設けるなど、散布遅れを防ぎましょう。

#### 漏水箇所の点検保守

除草剤散布後、葉の層(処理層)が田面に出来るまでおよそ4日かかります。漏水箇所があると処理層の形成がうまくできず効果が発揮されません。除草剤散布前に漏水箇所が無いが、水尻は止めてあるか確認をしてください。

#### 水深確保で拡散上手

除草剤成分が拡散していくためには、1キ口粒剤で水深5cm以上の確保が必要です。フロアブル、ジャンボ、豆つぶ剤は7cm以上の水深で拡散が安定します。苗が一時的に潜っても、拡散させるためにたっぷり水を張り、田面が水面から露出しないようにしてください。

#### 表層剥離(カナ)対策

今年も異常還元(ワキ)に注意が必要ですが、合わせて表層剥離(カナ)の発生にも注意が必要です。カナは除草剤の処理層を壊してしまふため、除草剤の散布タイミングに注意をしてください。カナが落ち着く降雨後や散布前に水の入れ替え等をしてから散布します。

### 異常気象に備える

今年も春先から高温の日が続いており、夏にかけてはエルニーニョ現象の発生も予想されています。どのような気象が訪れても対応できるように、今から備えをしましょう。

#### 土壌の異常還元(ワキ)に注意

耕深が浅い場合、生わらの分解が一気に進むことで、土壌が酸素不足になります。この影響により、根の伸長が抑えられ、葉色が淡く、分けつ不足となります。圃場に足を入れた時に「ブグブグ」と気泡が発生する場合は、水の入れ替えや夜間落水をし、土中のガス抜きを行います。飽水管理も有効です。ただし、除草剤散布後の落水禁止期間に留意ください。

#### 分けつ確保を最優先に

飽水管理や浅水管理による日較差を利用し分けつを促進させます。低温時は深水管理で保温管理とします。基肥一発型肥料のみ施用の圃場は、硫酸(現物5kg/10a程度)を追肥し、肥効(溶出)の遅れを補います。

#### 基肥でケイ酸肥料を施用していない場合

稲はケイ酸植物と言われるほど、チッソ・リン酸・カリの三大栄養素以上に「ケイ酸」を吸収します。どのような気象であっても「ケイ酸」の有り無しが収量品質を左右するほど、稲と「ケイ酸」は密な関係です。「ケイ酸」は、幼穂形成期から急激に吸収されるので、基肥で「ケイ酸肥料」を散布していない場合は6月下旬までに散布が必要です。

#### まだ間に合う中間追肥

<b>けい酸加里</b> (施肥量: 20kg/10a) ケイ酸と加里を含み、葉を硬くし受光体勢を良くし登熟が向上します。	<b>シリカ未来</b> (施肥量: 40kg/10a) ケイ酸と鉄を同時に供給し根の活力を高めます。秋落ち田の改善にも一役買います。
<b>P K - 40号</b> (施肥量: 20kg/10a) リン酸、加里、苦土を保証した肥料です。茎を丈夫にし根張りが増し、食味向上が期待できます。	<b>マグコーブ</b> (施肥量: 20kg/10a) リン酸と苦土が含まれており、良食味米生産に寄与します。土壌を選ばない資材です。